シャイな人が与える対人印象の実験的検討

シャイな人の肯定的な側面に着目して

○澤海崇文^{1,4}・藤井勉^{2,4}・相川充^{3,4}

(¹ 東京大学大学院人文社会系研究科・² 学習院大学文学部・³ 東京学芸大学教育学部・⁴ NPO 法人教育テスト研究センター (CRET))

キーワード: シャイネス, 対人印象, 社会的望ましさ

An experimental study on interpersonal impressions of shy people: Focus on positive aspects of shy people

Takafumi SAWAUMI^{1,4}, Tsutomu FUJII^{2,4} and Atsushi AIKAWA^{3,4}

(¹ Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, ² Faculty of Letters, Gakushuin University, ³ The Department of Education, Tokyo Gakugei University, ⁴ Center for Research and Educational Testing (CRET))

Key Words: shyness, interpersonal impression, social desirability

目 的

シャイな人々というのは“恥ずかしがり屋”“照れ屋”等の言葉で日常的に表されており、彼らが持っている特性“シャイネス”は万人に共通とされる (Zimbardo, 1977)。シャイネスとは、対人場面において生じ、社会的不安と対人的抑制という特徴を持つ、情動のかつ行動的な症候群と定義される (Leary, 1986)。ここで、症候群という表現から見て明らかのように、シャイネスは対人場面において、概して悪影響を持つものであると考えられる。しかし、シャイネスに対するこのような否定的な見方は、日本社会にそのまま適用できるとは限らない。後藤 (2001) によると、日本社会においては謙虚や遠慮という美德が重要視されており、シャイな人がこれらの美德を保持している可能性があるため、シャイネスに対する欧米文化と日本文化での見方は異なっているといえる。

以上の点を踏まえ、本研究では、日本社会におけるシャイネスに対する見方を探る。具体的には、シャイな人が他者に与える対人印象について実験的に検討する。そして、シャイな人が持つ対人印象の肯定的な側面を明らかにする。

方 法

実験参加者 東京都内の私立大学生 102 名 (男性 34 名, 女性 68 名; 平均年齢 20.28 歳, $SD = 0.59$) が実験に参加した。

材料 実験は質問紙を配布して実施された。質問紙の最初に、架空の人物のシャイネス尺度への回答が呈示された。具体的には、相川 (1991) の 16 項目よりなる特性シャイネス尺度 (TSS) への回答パターンを 3 種類作成し、高/中/低シャイ条件を操作した。高シャイ条件では、5 件法の TSS に対して、架空の“回答者”がランダムに 4 または 5 (反転項目においては 1 または 2) を選択している回答パターンが呈示された。一方、低シャイ条件では、高シャイ条件と正反対のパターンが呈示された。また、中シャイ条件においては、“回答者”がランダムに 2 または 3 もしくは 4 を選択している回答パターンが呈示された。実験操作の際、これらの回答パターンが実在する人物による回答であり、当人の許可を得て呈示していると教示がなされた。

実験参加者は、上記の 3 種類の回答パターンのうち、ランダムに 1 種類が配布され、回答パターンを見た後、その“回答者”に対する印象評定を行った。対人印象は沼崎・工藤 (2003) より 23 対の形容詞を採用し、5 件法の SD 法により評定された。

手続き 講義時間の一部を使用し、集団で一斉に行われた。

結 果

SD 法における 23 の形容詞対に対して探索的因子分析 (最尤法, プロマックス回転) を行った。まず、固有値 1 以上という基準に基づき、3 因子が抽出された。次に、どの因子にも因子負荷が .40 に達していない項目を削除し、最終的に 21

項目が残った。第 1 因子は“外向的な”“積極的な”“明るい”“軽い”などの項目が寄与していたため、“活動性”とした。第 2 因子は“親切的な”“謙虚な”“感じのよい”“誠実な”などの項目が寄与していたため、“社会的望ましさ”とした。第 3 因子は“責任感の強い”“粘り強い”のみが寄与していたため、“責任感の強さ”とした。各因子に関して、因子負荷が .40 に達した項目を合算平均して下位尺度を構成した (それぞれ $\alpha = .96, .77, .73$)。

続いて、対人印象に関する 3 つの下位尺度の得点を従属変数、TSS への回答パターンを独立変数とする参加者間 1 要因分散分析および下位検定 (5%水準の Bonferroni 法) を行ったところ、以下の結果が得られた。まず、活動性得点は低、中、高シャイ条件の順に有意に高かった ($F(2,99) = 433.12, p < .001$; 順に $M = 4.28, 2.90, 1.94$)。次に、社会的望ましさ得点は条件間に有意な差が見られなかった ($F(2,99) = 2.05, ns$; 低、中、高の順に $M = 3.32, 3.30, 3.54$)。さらに、責任感の強さ得点は低シャイ条件が他の 2 条件に比べて有意に高かった ($F(2,99) = 12.93, p < .001$; 低、中、高の順に $M = 3.46, 2.89, 2.80$)。

考 察

本研究は、シャイな人が他者に与える対人印象を実験的に検討するため、架空の他者の回答を 3 パターン作成し、そのうちランダムに選んだ 1 つを実験参加者に呈示し、その他者に対する対人印象を SD 法により評価してもらった。その結果、シャイではない人に対して、活動性と責任感の強さの次元において評価が高かった。その一方、社会的望ましさの次元においてはシャイネスの高低が対人印象に影響していなかった。この結果は、日本社会においてはシャイネスという特性が社会的に望ましくないとはいえないことを示唆するもので、むしろ、“感じがよい”といった対人的に肯定的な印象を与えうる可能性を示唆していると考えられる。藤井・澤海・相川 (2012, 日心) の結果も踏まえて、更なる検討が望まれる。

引用文献

相川 充 (1991). 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 心理学研究, **62**, 149-155.

後藤 学 (2001). シャイネスに関する社会心理学的研究とその展望 対人社会心理学研究, **1**, 81-92.

Leary, M. R. (1986). Affective and behavioral components of shyness: Implications for theory, measurement, and research. In W. H. Jones, J. M. Cheek, & S. R. Briggs (Eds.), *Shyness: Perspectives on research and treatment*. New York, NY: Plenum Press, pp.27-38.

沼崎 誠・工藤恵理子 (2003). 自己高揚の呈示と自己卑下の呈示が呈示者の能力の推定に及ぼす効果—実験室実験とシナリオ実験との相違— 実験社会心理学研究, **43**, 36-51.

Zimbardo, P. G. (1977). *Shyness: What it is, what to do about it*. Massachusetts: Addison-Wesley.